

古代日本語における動詞基本形の捉え方 —不完成相か、完成相か、〈未来〉を表すのか—

ふくしま たけのぶ
福嶋 健伸（実践女子大学）

1. 問題の所在—古代日本語の動詞基本形を、どのように捉えるべきか—

古代日本語の動詞基本形^{*1}は、不完成相を表すという説がある。

- (1) アスペクトの点では、ツ・ヌ形が完成相であるのにたいして、はだかの形は不完成相である。
(鈴木 (2009:457)、下線は福嶋)

一方で、当該の形式が、完成相を表すことを示唆する研究もある。

- (2) なお、あえて古代語動詞基本形について、形態論的にテンス・アスペクトを規定すれば、完成相非過去という現代語と同じ位置づけになることになろうが、形態論的に考えるためには、まずは形態分析が不可欠である。

(大木 (2009:31)、下線は福嶋)

大木 (2009:29) によると、「何を示せば事態の存在を描いたことになるのかということの範囲が古代語と現代語では若干異なっている」ということであり、その若干の異なりというのが、事態の成立まで含意するか否かである（古代語の動詞基本形は事態の成立まで含意する）。それ以外のアスペクト的な意味は、大差ないという説である。

鈴木 (2009)、大木 (2009)、共に、中古和文系資料を主たる調査資料としており、どちらも用例をもとにした帰納的方法により考察を進めている。しかし、それにもかかわらず、結論は正反対といえる。さらには、土岐 (2010:205) 等が「古代語の基本形はこれらの（福嶋注：ノダ構文等の）表現性すべてを含む未分化な表現形式として、現代語より遙かに雑多な用法的広がりをもつもの」と主張する。加えて、野村 (2016:8-12) では、「完成相現在」という概念が論理的に存在することを述べ、「具体的な動きを表す無標の「ス」は、「ひとまとまり性」を持っている（「完成相」的である）場合が多い。」（野村 (2016:12)）としながらも、「本稿（福嶋注：野村 (2016) のこと）自体はこの種の「ス」を完成相現在と規定しているわけではない。本稿では「ス」を「不完了相」とするだけである。」（野村 (2016) の注 6）と述べて、結論として、古代語の動詞基本形は、「不完成相」とは異なる概念である「不完了相」と主張している。

不完成相か、完成相か、未分化か、（完成相現在のように見えても）不完了相か。結局、どうなっているのかよく分からない。これは看過できない事態であり、今一度、当該形式の捉え方を考えてみる必要がある^{*2}。

2. 正反対の先行研究を対立させることなく整理する—「一般言語学的手法」—

*1 動詞基本形（はだかの形ともいう）の範囲は、各研究によって微妙に異なっている。本発表では、文中と文末の別なく、他の形式が接続していない動詞の終止形と連体形を、動詞基本形と考えている。本発表では、一応、係り結びの例（連体形）も、動詞基本形に含めているが、データ上は別枠で処理をする。

*2 なお、古代日本語の動詞基本形に関しては、仁科 (2014) が、「無標性」「無色性」という概念を用いて整理を行っている。他の形式との対立において分布が決まる側面を無標性とし、動詞基本形という形式自体が有する「動きの概念を表す」という側面を無色性とするのである。本発表は、この仁科 (2014) の考え方を踏まえた上で考察を進める。

仮に今、不完成相 (imperfective) という枠を設定し、その典型的なものとして、動作継続 (progressive) という枠を考えたとする。現代日本語で、この枠の中に入る形式は、～テイルだといえる。では、古代日本語では、どの形式が動作継続の枠に入るのか。一般的な回答としては、動詞基本形 (及び、金水 (2006) が指摘する～タリの一部) となるだろう。

このように、ある概念の枠 (ここでは動作継続) を設定して、その枠を通して、各言語の形式を見るという手法を、福嶋 (2025) では、「一般言語学的な手法」と呼んでいる。この手法で考えた場合、古代日本語において、不完成相の典型例ともいえる動作継続の枠に入ってくる主たる形式は、動詞基本形である。現代日本語では～テイルとなるところに、古代日本語では動詞基本形が出現しており、動詞基本形の分布が、古代日本語 (不完成相) と現代日本語 (完成相) とで正反対であるようにみえる。鈴木 (2009) 等の指摘は、この面白さを捉えようとしたものであり、一般言語学的な手法として「不完成相」の枠を設定して古代日本語をみた場合、動詞基本形は不完成相であるという鈴木 (2009) 等の指摘は、誤りとはいえないだろう。

一方で、今度は、一般言語学的な手法で、「ひとまとまり (完成相的)」の側面を捉えてみたい。分かりやすい例としては、「タクシス」の「継起的」な例があると思う (タクシスに関しては工藤 (1995・2025) 等参照)。まず、現代日本語の例で説明したい。

(3) 先生が教室に入る。始業のチャイムが[鳴る／鳴っている]。

「鳴る」という形 (動詞基本形) だと「先生が教室に入った後、チャイムが鳴った」と考えられる。一方、「鳴っている」という形 (～テイル) だと「入る」という出来事が生じた時点で、既に「鳴っている」わけであり、出来事は同時的である。完成相であれば継起的、不完成相³であれば同時的となり、アスペクトとタクシスは相関する。

このような「タクシスとして継起的」という枠を設定して、古代日本語をみるとどうか。以下に『土佐日記』 (小学館の新全集) の例を示す。

(4) 「幣を奉り給へ」といふ。いふに従ひて、幣奉る。かく奉れれども、もはら風やま
で、(略) 楫取、またいはく、「(略)」といふ。 (『土佐日記』p.47)

文脈上、明らかに「いふ」「奉る」「いふ」という順で、物語が継起的に展開している。このように、「タクシスとして継起的」という枠の中にも、古代日本語の動詞基本形は入ってくるのである。詳しくは次節で確認するが、当時の動詞基本形には、このような例が問題なく見られる。もし、当時の動詞基本形が現代日本語の～テイルに近いものであれば、「言っている」「奉っている」「言っている」のような解釈になり、継的に物語が進むことはないはずである (「タクシスとして継起的」の枠には入らないはずである)。

「タクシス」という用語こそ使用していないものの、このような、古代日本語の動詞基本形にみられる、現代日本語の～テイルとの異なり (さらには、現代日本語の動詞基本形との近さ) を捉えようとした研究が、大木 (2009) や野村 (2016) といえる (特に野村 (2016:6) は、『源氏』の場合は、よく知られているように、地の文は大体「～ス、～ス」と展開する。」と述べ、事実上、タクシスに注目している)。一般言語学的な手法として「タクシスとして継起的」という枠を設定して古代日本語をみた場合、動詞基本形は完成相的という

*3 現代日本語の～テイルの場合、厳密には、継続相であるが、ここでは、「不完成相」「継続相」の違いが問題とならないので、このまま議論を進める。この点、福沢 (2015) の第5章の整理も参照のこと。

大木（2009）や野村（2016）の指摘も、また妥当といえる。

では、結局、古代日本語の動詞基本形は、どのように考えればよいのだろうか。次の 3. 節では、当時の実態を確認し、その後、4. 節で考察を進めたい。

3. 古代日本語の動詞基本形の実態—『土佐日記』の調査—

本節では、小学館の新編日本古典文学全集『土佐日記』（青谿書屋本）を調査した^{*4}。この資料を調査する理由は、青谿書屋本は、特別な事情により、紀貫之自筆本『土佐日記』の文言を、ある程度正確に保っていると思われるためである（橋本（1974）等参照）。

まず、動詞基本形のタクシスのイメージを見たい。当該資料の文末相当の箇所（翻刻で句点及び閉じかぎ括弧のある箇所）を抜き出したところ、全部で 501 例あった。このうち、～ヌ（33 例）や～ツ（4 例）等の例を除外し、動詞基本形だけを集めたところ、係り結びの例（18 例）を含めて、全部で 106 例あった（アリ・ヲリの例は除外した数である）。活用形と、当該例に新全集がどのような訳をあてているのかを示すと、次のようになる。

(5)			終止形 87 例		係り結び-連体形 18 例		連体形 1 例		合計 106 例	
現代語訳	スル／シタ	～テイル	75	6	3	12	1	1	0	0
	～デアル	その他	3	0	2	2	0	0	5	2

この 106 例のうち、当該例に、「スル／シタ」という訳があてられているものは、95 例（約 90 %）、「スル」の訳のものだけでも 88 例（約 83 %）あった。次の例のように、基本的には、動詞基本形は、動詞基本形で訳されていることが分かる（【 】内は現代語訳）。

- (6) 「まろ、この歌の返しせむ」といふ【言う】。おどろきて、「いとをかしきことかな。よみてむやは。よみつべくは、はやいへかし」といふ【言う】。

（『土佐日記』p.23）

この約 90 %（あるいは、約 83 %）の例の全てが、厳密な意味で完成相と解釈できるのかは分からない（その理由は後述）。しかし、～ヌや～ツの接続がなくても、物語は継起的に進んでいるのである。よって、当時の動詞基本形には、完成相的側面があるといえる。

また、動詞基本形が、～テイルで訳されている場合もある（全部で 4 例あり、全体の約 4 %。いずれも動作継続の場面である）。次のような例である。

- (7) その岩のもとに、波白くうち寄す【打ち寄せている】。（『土佐日記』p.35）

(7) のような例は～テイルの訳が自然だろう。ここでのポイントは、「当時、具体的な動きが継続している場面で、使用できる形式は、動詞基本形のみ」ということである（福沢（1997）等）。よって、数は少ないながらも、不完成相的側面があることも否定できない。

このように、古代日本語の実態を踏まえると、動詞基本形は、主として完成相的であるとも思えるが、一方で、「不完成相的ではない」とも言い切れない。このため、アスペクト的な観点から決着をつけることは、できないといえる。

次に、文中・文末における、全ての動詞基本形（係り結び-連体形を含む）を調査したところ、明確に〈未来〉と解釈できる例はなかった。この情報が重要だと思われるので、この点を踏まえて、当時の動詞基本形の捉え方を考えていきたい。

*4 目視による調査後、国立国語研究所（2023）『日本語歴史コーパス 平安時代編 I 仮名文学』（短単位データ 1.3 / 長単位データ 1.3）<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html#kanabungaku> にて、再度、確認した。

4. 古代日本語の動詞基本形は〈現実〉を表している

これまで、古代日本語の動詞基本形は、テンス・アスペクトの観点から議論されることが多く、「～キ、～ケリ、～ツ、～ヌ、～タリ」等との対立が考察されてきた。完成相・不完成相・不完了相という用語も、全てアスペクトに関するものである。当該形式の記述に諸説入り乱れる原因は、この点（テンス・アスペクトの観点から議論している点）にあるように思える。しかし、福嶋（2025）で述べたように、古代日本語の体系では、～ム・～ムズとの対立というムードの観点も重要である。この点に着目する必要があるのではないか。

結論からいえば、古代日本語の動詞基本形は、～ム・～ムズとの対比において、〈現実（realis）〉を表していたとする考え方（尾上（2001）、小柳（2018）、吉田（2019）、福嶋（2025）等参照）が、妥当だと思う。当時は、動詞基本形が〈現実〉を表し、～ム・～ムズが接続することで、〈非現実（irrealis）〉を表すという体系だったと考えられる。

「古代日本語の動詞基本形は〈現実〉を表す」と捉えると、これまで見てきた状況が、次のように統一的に説明できる。

- (8) ①動作継続を表す→既に目の前で生じている動作を〈現実〉として表現しているのである。このため、当該形式が動作継続を表しているようにみえる。
- ②タクシスとして、継起・同時の両方を表す→〈現実〉を表す形式なので、そもそも完成相的かどうかに関与しない。このため、現代日本語で解釈する際、「ひとまとまり」として解釈できる場合もありうる。
- ③未分化な表現形式にみえる→〈現実〉を表す形式で、完成相的かどうかに関与しないので、アスペクト的な観点からみると未分化にみえる（当然、動きの概念そのものを表すような場合（無色性のレベル）は、いつの時代も、未分化ともいえる場合がある）。また、ノダ構文の一部もカバーしているようにもみえる。

アスペクトの観点から古代日本語の動詞基本形を捉えようとすると、完成相とも不完成相ともとれるので混乱してしまう。これに対し、～ム・～ムズとの対立という観点から、〈現実〉を表すと捉えればよいというのが本発表の主張である。

ところで、『土佐日記』には、次のような例がある。

- (9) 船に帆上げなど、喜ぶ。 (『土佐日記』 p.38)

この例は、新全集の訳では「喜ぶ」になっているが、角川文庫『土佐日記』の訳では「喜んでいます」(p.70)となっている。現代日本語話者の感覚からすると、どちらなのか非常に気になる。しかし、当時の体系に即して考えると、動詞基本形は〈現実〉でありさえすればよいわけで、「喜ぶ」「喜んでる」の別を明確に意識する形式ではなかったのだと思う（現代日本語話者の感覚を当てはめては、いけないのだろう）。

ただし、〈現実〉を表すという考え方では、〈未来〉の例が説明できない（その他の例は説明できる）。このため、検討するべきは、当時の動詞基本形が〈未来〉を表す場合である。

5. 古代日本語の動詞基本形は、基本的には〈未来〉を表さない

結論から述べれば、古代日本語の動詞基本形は、基本的には〈未来〉を表さない（あるいは非常に表しにくい）といえる。以下にその根拠を具体的に述べたい。

土岐（2010）は、終止形終止法の調査を行い、当時の動詞基本形が〈未来〉を表すことを積極的に主張するものである。しかし、その調査結果を見ると、『竹取物語』『伊勢

物語』『大和物語』『堤中納言物語』『落窪物語』（以上、岩波の旧大系）、『寝覚物語』（学燈社、1972）、『源氏物語』（岩波の新大系）を調査しても、動詞基本形が〈未来〉を表す例は、『落窪物語』に 8 例、『源氏物語』に、たったの 1 例というものである（岡部（2012）もこの問題点を指摘している）。『竹取物語』～『源氏物語』は、相当な分量であり、〈未来〉を表す場面も少なからずある。それで、『落窪物語』以外、『源氏物語』に 1 例しかないのであれば、古代日本語の動詞基本形が、〈未来〉を表すことの証拠ではなく、むしろ、〈未来〉を表さない（非常に表しにくい）ことの証拠なのではないだろうか。さらに、土岐（2010）の調査した『落窪物語』の底本は寛政六年（1794 年）刊記のある木活字本である。1794 年は、日本に開国を要求したペリーが生まれた年であり、幕末に近い。従って、この本に見られる特徴的な分布は、平安時代のものとは考えにくい。

土岐（2014）では、土岐（2010）とは、若干、資料の底本等を変え、『竹取物語』『伊勢物語』『堤中納言物語』『落窪物語』『源氏物語』（以上、岩波の新大系）、『宇津保物語』（おうふうの『うつほ物語全』）、『大和物語』（岩波の旧大系）を資料に、動詞基本形の調査を行っている。土岐（2014）が指摘する、〈未来〉を表す、終止・連体異形活用語の 9 例の詳細は、『宇津保物語』の例が 1 例あること以外、分らない。土岐（2014:25）で注目すべきは、〈未来〉の用法が、終止・連体同形活用語も含めると、26 例もあるという報告である。しかし、土岐（2014:25）は、次の指摘もしている。

- (10) 終止・連体同形活用語も含めた B 未来用法は宇津保物語と落窪物語に集中しており、それ以外では、次の(23)の源氏の例(b1)が 1 例である。

『竹取物語』～『大和物語』は、かなりの分量である。それで、『宇津保物語』『落窪物語』以外、『源氏物語』に 1 例しかないのであれば、これは、『宇津保物語』『落窪物語』の問題として処理するべきであろう。

土岐（2014）が調査した『宇津保物語』と『落窪物語』の底本は、それぞれ、前田家十三行本と九条家本である。前田家十三行本は慶安三年（1650 年）頃の書写（中村（1969）等）、九条家本は、永正・天文頃（1504 年～ 1554 年）、または室町末期の書写とされており、中世末期の時期より前に遡ることはない（吉田（1986）等）。よって、いずれも、善本とはいえない。それぞれの伝本事情は、次の指摘の通りである。

- (11) 現存の『うつほ物語』の諸本は、全巻の書写年代が室町時代まで遡るものはない。しかも誤写・脱落・錯簡が多く、証本として信頼しうる状態ではない。

（新編日本古典文学全集『宇津保物語』の「凡例」より）

- (12) 『落窪物語』の伝本には善本はなく、古い写本もまったくない。古いといってもわずかに中世末期にかかるかと思われる程度のもので、大部分の写本は近世期のものである。平安朝に『源氏物語』に先立って成立したこの物語が室町時代や江戸時代にまで伝わるには、本文上に相当な書写上の変化を予想しなければならない。

（新編日本古典文学全集『落窪物語』の「解説」より）

もちろん、『宇津保物語』と『落窪物語』が古代日本語の実態を反映している場合もあると思う。しかし、これらの資料に偏って見られる用法であれば、『宇津保物語』と『落窪物語』の問題とするべきであって、古代日本語の分布を正確に反映しているとはいえない。これは、古い文献を扱う研究として、妥当な判断だと思う。

ところで、先の(10)で述べた、『源氏物語』の1例とは次のものである。

- (13) (源氏) 中々うき世のがれがたう思ふ給へられぬべければ、心づよう思給へなして、急ぎまかで侍 (福嶋部分訳：急いで退出致します)

(土岐 (2014:25) の(23)、下線も原文、「須磨」より)

このような意向を表す例は、大木 (1997・2009) も〈未来〉と考えるようである。しかし、仁科 (2014:60-63) は、この種の例が、一人称の行為に限定されること等に注目し、別様の把握 (福嶋注：時制以外の把握) の可能性を指摘する^{*5}。野村 (2016:15) も、当該の動作がほとんど始まっていることから、「ス」による未来は、どうも近未来に限られているようである。」とし、その制限を述べる。実は、土岐 (2010:194) も、「未来用法」について、尾上 (1997) の枠組みを踏まえ、「未生起の事柄が自らの意志的コントロールの下にあるものである場合、発話者にとって、その実現は確実性の高いものであり、現実事態構成の叙法である動詞基本形を拡張的に用いて表現することも可能である。」と指摘している。この土岐 (2010) の指摘から考えれば、意向を表す用例群を、「当時の動詞基本形は〈現実〉を表す」という記述の範囲内におさめることができるだろう。

残りの検討が必要な例は、時制的には〈未来〉とされる、大木 (2009) が想定と呼ぶ次のような例である ((14)と(15)は、大木 (2009) の 14 と 16。源氏は小学館の旧全集、古今は新大系の例である。下線も原文にあり)。

- (14) いとをかしうやうやうなりつるものを。鳥などもこそ見つくれ (源氏・若紫)

- (15) 枝よりもあだにちりにし花なればおちても水の泡とこそなれ (古今・春下)

研究の立場の違いと思われるが、本発表では、(14)は、典型的な「モノ・モコソ」の例として処理し、動詞基本形の例とは考えない。また、(15)も、「コソ 已然形」と考え、動詞基本形の例とは考えない。さらに、(15)の和歌の詞書に、「桜の花の、御溝水に散りて流れるを見て、よめる」(p.41、下線は福嶋)とあることから、「散って水上に流れている花びらを「水の泡」と表現する。」(平沢 (1990:31))、「水面に落ちた段階で花びらと知覚されなくて、泡のようになって流れてゆくと言っている」(片桐 (2019:562-563))と解釈できる (花びらが、これから、泡になるわけではない)。よって、本発表では、この例を〈未来〉の例とも考えていない (むしろ〈現実〉の例である)。以上のことから、この(14)や(15)をもとに、一般的な動詞基本形は〈未来〉も表す (だから、テンスとして中立なのだ) という議論は展開できないと思う (なお、大木 (2009) の想定例は、(14)と(15)以外、『落窪物語』(小学館の旧全集)からの挙例 (2例) であり、資料的に問題がある)。

古代日本語の資料には、〈未来〉を表す場面は少なからずあり、そこには、主に〜ム・〜ムズが分布している (〜ムを未来の助動詞とする文法書もある。詳しくは井島 (2009) 等参照)。このことを考えあわせると、「〜ム・〜ムズが〈非現実〉を表す (このため〈未来〉に分布している)」「動詞基本形が〈現実〉を表す (このため〈現在〉に分布している)」と捉えた方がよいだろう。

ところで、現代日本語の場合、運動動詞の時制表現が、基本的に次のように整理できる点は、多くの研究に共通している (町田 (1989)、須田 (2010)、仁田 (2019)、工藤 (2025)、

*5 時制以外の概念との関係でいえば、高山 (2021:42) が、「現実性の強い《未来》と、非現実性の強い《未来》」という考え方を示している。

福嶋（2025）等）。

(16)	未来	現在	過去
	動詞基本形(スル)	～テイル	～タ

厳密に言えば、現代日本語の動詞基本形や～タにも、「打球が、伸びる、伸びる」「あつ、お金があつた」のような、〈現在〉を表しているようにも思える例がある。しかし、これは、「特殊な条件下における用法」というものであって、このような例があるからといって、(16)の整理が根本から覆ることはないだろう。

同様に、古代日本語の動詞基本形に、〈未来〉を表しているように見える例があっても、限られた条件下での例ならば、別途、処理をすればよい。「～ム・～ムズが〈非現実〉、動詞基本形が〈現実〉」という対立が根本から覆ることはないように思う。

6. 古代日本語の体系から現代日本語の体系へ—1000年以上にわたる変遷を見通す—

本発表のように考えると、古代日本語から現代日本語までの体系の変遷が見通しやすくなる。福嶋（2025）で指摘したように、両言語の中間地点ともいえる、中世末期日本語の体系を間に挟むと分かりやすい。1000 年以上にわたる体系の変遷は、次のように示すことができるのである（以下、福嶋（2025）の第 11 章をもとにしている）。

(17) 日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷

	非現実の一部	現実の一部	
	未来	現在	過去
古代日本語	～ム・～ムズ	ス	～タリ ～ケリ ～キ
中世末期日本語	～ウ・～ウズ(ル)	スル ～テイル	～タ
現代日本語	スル	～テイル	～タ

※動詞基本形は「ス」「スル」で表記する。

中世末期日本語では、～テイルという形式が台頭してくるが、存在動詞「イル」の意味が比較的強く残っており、「西もんに立っている」（『虎明本』中 p.424）のような存在文的な例に、分布が偏る（全ての動詞に義務的に接続するわけではない）。また、～タリの影響が完全に消滅したわけでもなく、「又あの目のくるとしたもにたよ（「似ている」の意）」（『虎明本』上 p.179）のような、文末で現在の状態を表す～タも存在する。このため、「～タの有無によって、〈過去〉と〈非過去〉の対立が表現される」というシステムは、まだ、確立していない。動詞基本形にも、「雨もふらぬにかさをさひて歩くは」（『虎明本』下 p.77）のような動作継続と解釈できる例が多数存在する（「歩いている」のような、動きのある動作継続の～テイルの例は、当時、ほとんどない）。よって、「～テイルと動詞基本形が、〈状態（継続的）〉と〈非状態（完成的）〉の対立を成す」というシステムも、まだ、確立していない。〈未来〉の領域には、「この学者を殺さうことは本意無い」（『天草伊曾保』p.433）のように、（～ム・～ムズの後継の形式である）～ウ・～ウズ(ル)が数多く分布している。このような中世末期日本語の体系は、古代日本語と現代日本語の中間的な姿であるといえ、説得力があるものだと思う。

現代日本語に近づくにつれ、～テイルは、存在文的な意味から発達し、全ての運動動詞に接続できる、義務的な状態化形式となる。～テイルと動詞基本形が、〈状態（継続的）〉と〈非状態（完成的）〉の対立を成すようになるわけである（①【現代日本語のアスペクト

体系の確立』)。

～テイルが状態化形式として成立すると、〈現在〉の領域を全てカバーできるようになる。そうすると、「似ている」等が広く分布するようになり、「似た」等で〈現在〉を表すことがなくなる。～タが〈過去〉の領域のみに分布することになり、「～タの有無によって、〈過去〉と〈非過去〉の対立が表現される」というシステムが確立する。運動動詞の場合に限っていえば、「動詞基本形は〈未来〉、～テイルは〈現在〉、～タは〈過去〉」というシステムが確立する (②【現代日本語のテンス体系の確立】)。

また、～テイルと動詞基本形が、〈状態 (継続的)〉と〈非状態 (完成的)〉の対立を成すようになると、動詞基本形は、ひとまとまりの完成的な運動を表すようになり、〈現在〉には分布しにくくなって、〈未来〉に分布するようになる。〈未来〉とは、〈非現実〉の領域の一部である。無標の形式である動詞基本形が、そのままの形で、〈非現実〉の領域を表すようになると、「～ウ・～ウズ (ル) の有無によって、〈現実〉と〈非現実〉の対立が表現される」というシステムが崩壊する。ここにおいて、古代日本語の～ム・～ムズから継続していた、有標の形式で〈非現実〉を表し、無標の形式で〈現実〉を表すという対立が崩れる (③-1【古代日本語から続いていたムード体系の崩壊】)。現代日本語にも、～ダロウ等の形式があるが、これらの形式の表す意味は、〈非現実〉よりもずっと狭いものとなる (③-2【新しいモダリティ体系の台頭】)。

これが、日本語におけるテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷である。

この①～③は切り離すことができない体系的な変化である。動詞基本形が何と対立しているのかを押さえた上で、「～テイルの発達」と「～ウ・～ウズ (ル) (／～ム・～ムズ) の減少」を関連させて捉えるという、これまでになかった発想で考えることにより、1000年以上にわたる変遷を見通せる視点が得られるというわけである。

本発表では、古代日本語の動詞基本形をめぐる論争に、一応の決着をつけ、その上で、古代日本語から現代日本語までの変遷を見通した。また、本発表の主張は、これまで、共に、中古和文資料とされてきた作品群の中にも、底本の情報に大きな差があり、この差に注目しないと、正確な記述ができないことを意味している。

【引用文献】井島正博 (2009) 「近代文典におけるいわゆる推量助動詞」『日本語学論集』5/大木一夫 (1997) 「古代日本語における動詞終止の文と表現意図」『日本語の歴史地理構造』明治書院/大木一夫 (2009) 「古代日本語動詞基本形の時間的意味」『国語と国文学』86-11/尾上圭介 (1997) 「国語学と認知言語学の対話Ⅱ」『月刊言語』26-13/尾上圭介 (2001) 『文法と意味Ⅰ』くろしお出版/岡部嘉幸 (2012) 「書評」土岐留美江著『意志表現を中心とした日本語モダリティの通時的研究』『日本語の研究』8-2/片桐洋一 (2019) 『古今和歌集全評釈 (上)』講談社学術文庫/金水敏 (2006) 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房/工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房/工藤真由美 (2025) 『文と時間』ひつじ書房/小柳智一 (2018) 『文法変化の研究』くろしお出版/鈴木泰 (2009) 『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房/須田義治 (2010) 『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房/高山善行 (2021) 『日本語文法史の視界』ひつじ書房/土岐留美江 (2010) 『意志表現を中心とした日本語モダリティの通時的研究』ひつじ書房/土岐留美江 (2014) 「動詞基本形終止文の表す意味」『日本語文法』14-02/中村忠行 (1969) 「前田家十三行本『宇津保物語』その他」『宇津保物語研究会会報』2/仁科明 (2014) 「「無色性」と「無標性」」『日本語文法』14-2/仁田義雄 (2019) 「「する」が未来を表す場合」『日本語のテンス・アスペクト研究を問直す 1「する」の世界』ひつじ書房/野村剛史 (2016) 「古代日本語動詞のアスペクト・テンス体系」『国語国文』85-11/橋本不美男 (1974) 『原典をめざして』笠間書院/平沢竜介 (1990) 「古今集」の春の部、散る桜の歌群の構造」『国文白百合』21/福沢将樹 (1997) 「タリ・リと動詞のアスペクチュアリティー」『国語学』191/福沢将樹 (2015) 『ナラトロジーの言語学』ひつじ書房/福岡健伸 (2025) 『中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系』三省堂/町田健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』アルク/吉田幸一 (1986) 『おちくほ』古典文庫/吉田永弘 (2019) 『転換する日本語文法』和泉書院/[中世末期日本語の資料]『大蔵虎明本狂言集の研究』上中下巻 表現社 (略『虎明本』) /『文禄二年 耶蘇会板伊曾保物語』京都大学国文学会 (略『天草伊曾保』) ※副題は省略。 ※本研究は JSPS 科研費 19K00631 の助成を受けたものです。